

千葉大学看護学部

同窓会たより

2006年5月発行

ご挨拶

同窓会長 中村伸枝（2期）

同窓会会員の皆様におかれましては、新年度を迎え新たなお気持ちでご活躍のことと思います。

看護学部は昨年度 30 周年を迎え、同窓会記念集会や記念誌の発行が行われました。記念集会および記念誌の発行ではたくさんの同窓生の皆様のご協力やご参加を頂き、誠にありがとうございました。記念集会のレインボジウムでは看護学部創設当時から現在までを石川稔生先生、橋爪壮先生、吉武香代子先生、野尻雅美先生、和住淑子先生のご講演と会場でのディスカッションでつなぎ、とても心に残る集会となりました。ビデオレターにご参加くださった先生や寄付をお寄せいただいた先生方にも御礼申し上げます。

記念集会では、特に 10 期までの同窓生の参加が多く、20 期以降の同窓生の参加は少なめでした。30 周年記念企画委員長を務めた酒井郁子氏は、「熱意を受け継いでいきたい」ということばで集会を締めくくりました。新しく同窓会会員になった方々に同窓会を受け継いでいって頂けるように、新たな 10 年を築いていきたいと思います。今年の同窓会総会では、名簿発行や同窓会入会のあり方について皆様のご意見を伺いたいと思います。講演や座談会なども用意しておりますので、ぜひご参加くださるよう、お願いいたします。

…看護学部のこの頃…

同窓会顧問 学部長 石垣和子

今年の桜は駆け足でやってきましたね。新たな同窓生は元気に巣立っていきました。全国でご活躍の先輩の皆様、新人をどうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、皆様にご報告することは 30 周年記念式典が盛大に無事行なわれたことです。看護学部主催、同窓会主催、そして千葉看護学会の学術集会と 3 日連続の催し物があり、大勢の懐かしい顔が集まり賑やかな時となりました。

さて、学部の近況として、昨年度の新入生から始まった新カリキュラム、入学試験の変更、乳がん看護認定看護師教育開始などがあります。

教員は、来年あたりまでは新旧二本立てのカリキュラムを行なうことになり、一層忙しくなっています。入学試験の変更は、今年度の入学生から後期日程の入試を廃止するというものです。なるべく多くの受験機会があるほうが望ましいと言われていますが、看護学部では前期日程までに千葉大学看護学部にもふさわしい学生を選抜したいと考えた結果です。乳がん看護認定看護師教育は、日本の女性に最も多いがんである乳がんの特化したエキスパート看護師を養成するものです。これは 6 ヶ月間での集中教育ですが、昨年からはじめたところ大変人気が高く、21 名の方が修了されました。今年度は 30 名に拡大します。多くの千葉大学の卒業生に講師として助けていただいています。なお、3 年間はブリストルマイヤーズスクイブ財団からのプログラム推進の支援をいただいております。

相変わらず、日本文化型看護学創出に向けた COE 研究が活発に行なわれています。あと 2 年間続きますので、これからでも興味を持って参加していただけることは大歓迎です。今年はワークショップなどを計画していますので、ご参加くださいますようよろしくお願いいたします。

全学では、千葉大学の古在学長をはじめとした現体制が、「ようこそ大先輩」などの企画を誕生させ、先輩から在学生へのメッセージを 1 時間程度のお話の形でいただくことが始まりました。看護学部への期待は高いので、もしお願いが行きましたら受けてくださいますようお願いいたします。

以上、簡単に報告させていただきました。

最後になりましたが、皆様のますますのご活躍をお祈りしております。

歴史と相互交流

集会報告

2005 年 9 月 23 日(金曜日)、千葉市文化センターにて、30 周年記念集会が開催されました。参加者 121 名、18 人のお子さんも一緒に楽しみました。

ホール企画

10:30-10:40 石垣和子学部長あいさつ

12:30-13:30 サークル舞部

ダンスパフォーマンス

13:40-16:20 元教員によるリレーシンポジウム

石川 稔生 先生

橋爪 壮 先生

吉武香代子先生

野尻 雅美先生

和住 淑子先生

座談会企画 10:45-12:30

- ① 仕事・キャリアアップ そのとき私は
- ② 家庭としごと いかに両立させるか
- ③ 現在の活動 いま、がんばっています

展示企画 10:30-13:30

- ① 実習服の移り変わり
- ② 世の中と千葉大と看護学部 年表
- ③ 元教員からのビデオレター

リレーシンポジウム ほんとうにありがとうございました。

- ★ 学部創設期の様々なご苦労や今だからはなせるいろんなことをはなしてくださった、石川先生。先生がご持参くださった金、銀、銅の学部記念メダルは、企画委員がしっかり写真に撮らせて頂きました。
- ★ 橋爪先生が語る臨床経験、ご自分の進路選択の理由は、初期の同窓生も初めて伺うお話であり、本当に心を揺さぶられるものでした。研究者としての矜持を見せてくださったと思いました。
- ★ 看護学部がずっと大切にしてきた「実習」。それは、吉武先生から始まったと言っても過言ではありません。今は当たり前のように行っている臨地実習も切り開いていくときには思いもかけないことが障壁になったり、後押ししてくれたり、そして、今があるのだと感じさせられました。
- ★ ヘルスから QOL へ。あの伝説の最終講義がバージョンアップして戻ってきました。現在の野尻先生のご活躍がパワーポイントの一枚一枚からにじみ出ているようでした。



- ★ 学部学生時代の写真、大学院時代の写真、教員時代の写真を写しながら、話してくださった和住先生。育てられ、育ち、育てる、その循環によって、学部の過去から現在、未来が作られていくということを感じ取ることができました。
- 会場の同窓生は、看護学部のこれまでの「プロセス」を聞き、いろんなことを考えてくださったと思います。会場からもさまざまな発言をいただき、充実した時間を過ごすことができました。

座談会企画

学部が得意としてきた座談会。話し合いが活発に行われ、終了期間が延長したテーマもありました。自由に移動しながら、いろんなことを聞き、話す。根っこがおなじだからこそ、その場で出せる迷い、悩み、それを共有していく場の心地よさ、作られていくネットワークがありました。

展示企画

実習服展示は、並べてみると、本当に変化(進化?)していったことがよくわかりました。資料的価値も高い企画でした。自分の期の実習服の前で記念写真をとっている人が多くいました。

年表には書き込みをしてくれた人もいて、同窓生が足を止めていました。当日は急遽、改装後の校舎の写真を展示しました。

元教員のビデオレター放映、同窓生のネットワークを活かし日本中から映像を集めました。

メッセージをお寄せくださった先生方のお名前(50音順)

井出成美先生	井上智子先生	牛尾裕子先生	内田雅代先生	雄西智恵美先生
兼松百合子先生	北山三津子先生	櫻庭 繁先生	佐藤禮子先生	杉森みど里先生
武田淳子先生	永井優子先生	中村宣生先生	野口美和子先生	濱中喜代先生
前原澄子先生	山岸春江先生	吉澤花子先生		



舞部の舞い

すごく楽しむことができたステージでした。若くて美しい後輩たちを誇らしく思いました。サークル顧問の田中裕二先生が舞台袖から、父親のように、心配そうに見守っていましたよ。

懇親会

サンガーデンで同日の 17:30 から懇親会を行い、各期ごとに近況報告などを行いました。お約束の記念写真を撮り、希望者には後日郵送しました。

記念誌編集委員会からのお知らせ

看護学部創立 30 周年にあたり、“同窓会記念誌”を作成しました。64 名の同窓生の現在の活躍(1 章)、亥鼻キャンパス紹介(3 章)、同窓生が歩んだ実習の思い出(4 章)など盛りだくさんです。

表紙(工学部小原先生デザイン)には、30 名の卒業生の顔が…。学部資料も多数掲載し、これから歴史的な価値がでるのでは(?)、と思っております。それになんといっても、読み応えがあります。まだ、購入されていない方は、ぜひ、お申し込みください。同窓会総会でも販売予定です。

値段は 3500 円です、20 周年記念誌と一緒に購入いただくと、2 冊で 5000 円になります。

下記の同窓会の振込み口座へお申し込みください。なお、30 周年記念誌、あるいは、20 周年と 30 周年記念誌と通信欄にお書きください。

【お振込み先】 口座番号:00170-4-554460

口座名: 30周年基金

30 周年記念行事企画委員から

記念行事企画委員会は、2 期生から 26 期生まで 16 人でほぼ 1 年間たのしく月に一度集まりました。同窓生へのサービスを大切に考えていろんな企画を考えました。若い人たちのアイデアと行動力を実感しました。次は 10 年後。

世の中は、千葉大は、そして看護学部は、どのような変貌を遂げているのでしょうか？

40周年に向けて、次の一步を踏み出しましょう



国際協力の現場での卒業生との出会い

佐藤 禮子

(成人看護学教育研究分野・元教授)

今、私はウズベキスタン共和国の首都タシケントのホテルで原稿用紙に向かっている。これを完成させて、帰国したらすぐ大学から北島さんにメールしようと考えながら。ここでの私の任務は、JICA がウズベキスタンに供与する看護教育改善プロジェクトの成人・老年看護学領域責任者として役割を果たすものである。短期専門家派遣でこの国を訪れるのも、平成 16 年 8 月に始まりすでに 5 回目になる。訪れた当初のタシケントは、砂漠の首都であるが、日本大使の随筆によると、開発途上国ではなく中進国の首都として急速に繁栄しているということであった。確かに、当初に比べ、街並は明るくきれいになり、中古車が乱雑に行き来していた街の中心も、新車が目立って感じられた。しかし、しかし、トイレ事情は、昔の日本を思い起こさせて懐かしいが悩みの種。

ところで、私が同窓会便りを前掲テーマで発信しようと考えたのは、タシケントへの乗り継ぎとなるソール・インチェン空港で、「先生、私卒業生です……」とにこやかに声をかけてくれたことに端を発している。彼女、田村須賀子さんは、別の JICA の任務で、山岸映子さんと共にタジキスタンへ行く途中であり、我々と同じホテルに一泊して現地へ向かった。そして、もう一つの懐かしく嬉しい再会があった。それは、河原宣子さん。私の属するプロジェクトに専門家として短期に派遣され活躍していたのである。この異国での卒業生との出会いは、何とも言えない喜びと感動を私に与えてくれた。実は、同じプロジェクトには、大活躍の櫻井礼子さんと石田宣子さんがいる。やみくもに飛び込んだ JICA の仕事を通して、看護学部底力のすごさにあらためて感動し、有難いと思った。

国立で唯一の看護学部（法人化された現在では言い方も変わるが）は、独自の社会的使命を持つと考えている。それは、我国の看護学を、真に人々にとって価値ある学問として確立させ役立たせていくこと、即ち、実践の科学である看護学が、学術的にも社会的にも認知され、その位置付けが確かなものになるように貢献することである。それには、看護の実践現場で、患者、家族といった利用者が質の高い看護を提供されたと実感することや、医師らの協働者が高く評価することが必要となる。学部卒業生に送るメッセージには、常に限り無い希望と要望と責務の期待が込められている。この使命を現実の姿で示してくれる卒業生に出会うことは、この上ない幸せである。現在も、様々な現場で、新入りからベテランまでの卒業生が働いており、専門職者としての自分に対する評価も色々であろうが、確かなことは、卒業生は優れた資質を持っており、学部教育はその能力を確かな専門職者能力に育て上げているということである。未だ実感出来る程に自分の力を自負出来ない人もいるかもしれない。しかし、看護学部で学んだ自分を信じてほしいし、自信と誇りを持ってほしい。そして、自分に潜在する能力を開花させるのは、自分の努力でしかないことを肝に銘じて頑張ってもらいたい。変革を迫られる医療現場は苦難の日々である。それでも、私は愛を込めて皆様に限りない努力を期待している。